寛永諸家譜

大江氏

四巻之内

143

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186 (143)
函號 特 76 1

裏面記載のない箇所は省略

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

元利

寛永諸家系図伝

大江姓

元利

先祖乃系図長門守秀就と称し
秀就子松平乃氏を賜まふと以
ゆゑも秀元を本氏とあらこめず

浅草文庫

元就

小輔次郎　右馬頭　陸奥守　従四位上

正三位

備中守弘元が次男なり兄真元が子幸松丸
八歳なりしが早世せしに被ゆえ大永
三癸未八月十日元就ひそかに安芸國
吉田郡山の城へ入
藝州佐東乃武田氏吉田へ働くこれを
武田討負元就大利を得て頸数級を討
捕け勝なり諸将乃伯おなじく元就に

きこゆ
居る伊与守元就が智謀を知て意志を
通ず伊与守が孫晴久元就にいろうて
元就とふ和睦くはれを討んと企
元就則大内義隆と
通ぜんがためなり元就を山口へ出す
時に三道上野廣良真福寺新宮
元就乃居城郡山をせんとす居る

伊与国が井下野守を誘ていとく郡山を
せめんとすべしとず只和睦せらるべ
し元就さなりなを面しねて
取けくかこどんバ後代と乃恥辱
べしやとて暫くさうずして大文九年
九月七日に軍勢をひきひく郡山へ
押寄郡山大山ハ七日乃道あり
こゝを而ハて欲味方たゞひよ様と合せ
城兵勝利とひく事ハ引退く

元就自分に働事ハ鬼角ハ捕元毎
その内数度に合戦城兵毎度勝
ちの事ハ退屈ける而ハ大内
義隆ハ加勢ハ陶尾張守晴賢
人数なひこそひ来る尼子ハ引乃き
陣を晴賢へ尼子が陣へ
ます時ハ先手ハ野平兵三千人
ぐりのを下賜ハ諸士をとげます

進く源頼とうちとり相にくるを近
く城小うち死を聖年正月十三日
時久敗北を大宮うちまくとい
うつ事あるこうず
天文十一年乃義澄兵をひさい
て雲別所ゑ多城攻せんとて
う城ちとい所うち庫を攻名城攻
乃評議して波城乃向けうき山
庫をよすゑ時うえ就

諸ていくちく庫を攻ーとうし
うえうずこを攻き所ゑ数を攻ど
弓等うり走を多し
一旦れ力攻なを
を走ざけこを内 種乃調略をせど
時利をゆべしいい家ゑ義澄を
乃居田ゑ兵庫志ちに庫をちく
攻ちうえうべしとい進ふちまく
義澄進くけうらさい庫をやう

志うをせい(ども)攻落をすべき
して日数を送れば西に寄せ来る
野伏をおし通ると云へども兵粮
兵粮こゝろ〳〵く意を誘乃なを陣す
疲く日年五月十七日寄手敗軍を義澄
が養子乗八板を意乃浦より引く時
船を流く溺死をけ時元純ハ行方知
り陣を取寄手敗北せざる先
元純淘見法師小

体をうゝ稱ぐ敗軍ハ法あつまるを
ちつゝひとをくしをれまうの朝乃
ごとく法螺をを引さうり進路若
小亦引退く欲こうぐく進寄
ひまれば寛尭の元光寄討死を
志道ぐも元純数度あを敗を
おかく討捕
うゝ元純澄京元春山口下向を
義澄抗解をうずして内裏

下野守が女を養子として聟
とす婚礼を調て坂井右四郎陶
坂又元就父子山口へ引く義隆が切腹あ
しくして陶が思ふ通れて
大内家断絶すべき見所のよ
ふく右四郎陶こさり隆元人質
ふく山口へあつまれを引うん
ごめ様く諫をもつく様ん隆元右四郎
陶ふくて相ふく義隆と陶と中よ

ず
ごめ陶尼法名信を以
ふも義隆用ひざ義隆が法名を信ぜ
を法名武田とふものあり陶と中の
しき故常々是を憎し陶我こ
れの主が國盛をこんとす義隆を
信じく陶を殺すべきの内談を枕
伯耆守告伯耆国へ武士を遣べし
とうく坂ひ小陶小内通を

二進小まるく陶病あつまと称し富
乃居城へ以ることなりて豊後の大友
一統来り大友家麟が弟八郎義長
を大内氏家へ送りてんとしひろく軍
勢をひさめく山口へ押寄義隆強て
乃敵をなくなる注進ありへおもむく
数度和談ふといへども遂に立帰
たく陶と屋して義隆が兵をくる
故天文二十年八月二十八日

乙刻吉見を頼て山口をさるく落ゆく
陶が兵追掛源内大寧寺ふるく
同年九月朔日已乃刻義隆切腹を
討て四十五歳のとき冷泉判官
豊後天野薩摩郎十郎八幡大宮
右衛小幡四郎五郎等力をつくして死を
冷泉判官義隆死骸を欲数十人を
切殺し後小自害をそ乃ち陶
安房守を豊後へ義長を招さ

むと大内乃家をけぐしむ陶すのんれ
まつり筆事を取おこ相良を宮
ち義隆被生乃時ちを筑前ちをへ
退ぞす陶を山口へめしせ後す
殺せを
陶又義長を大将とを門乃城石列
ち見れ大義大浦正殺ゑ城へ押寄を
改ち而ち元就国陶乃城をち攻をと
国元ける巻ば陶国防長門ち攻而れ

人数とをよおし文川甲斐をを大将と
して義別ち市乃洞宮ちのと打安畑
ゆ宮山へ討上ち時ち元就これをみて
陶すくち右見をはろぐて山而へ
来まちをちひを合戦れ場れ
ゆて山くち乃手あくして一回小切く
加ち道ち猪利を出をち文川
甲斐やとば進岩伝を毒活来田新蔵
これを討捕ち乃いさ力しちを

防別乃内まで元就ゟ被ㇾ為ㇾ
詰ㇾ蜀田乃言葉と云ふ山と和之武田
刑部と亟元就ゟ極山をとりつめ
城ゟ〻進撃被ㇾ為ㇾ亟
元就厳嶋ゟ城と築んとて渡海
すゝ所ゟ不意小舟二艘来て
と却取くゝ之頸を取宮乃馬場ゟ
元就中ゟ会じけ合ひ嶋
ゟくいゟ大利をなべき奇瑞い

ちゟるゝゟてゝ渡海乃ゟさか
くのゝゟ誠ゟはれ大明神のか護
なりと感悦すること甚し
詰尼孤ゟ時賢乃ちゟ刑戮して全義
中ゟ号す云尼と和平して藝別此境
関治乃岩国ゟ神社全義弥三治ゟ
評へ使を遣ゟ厳嶋へ和ゟ
文乃城を攻落ゟべしといひをゟ
三河ゟこゟくいゟく元就ゟ良ゟ小

して諫をめぐらし巖湯乃城を
攻おとさむ陶方此義渡海しく
城をせん時らと見合せく勝負を
一戦に決すべしとのてぞくるる
べし金義三郎の方ハ力をつくれ
勝負きる思しもうず云用れる
なりとハ金義を同くいく三湯
脇病ハくその吳見ハ乃こくなる
べしとて国防長門別統別こそ

数万乃人数をあつむ豫国大内より宇賀湯
やハ乃志船五百艘漕ハく巖湯へ渡る
岩国ハ前乃ハ乃浦をまりて打
ゆる志巖湯にみちくる金義
志塔乃岩に陣をとる元就ハ怪さ
武者ハしぐ波海してうるまさを
するるをへしとおもうる屋敷
ひく城をせむ水乃手をかる
さらて事をぐくに五ヶ日ハ及び

塀矢蔵乃下を切て蔵され引おこ
さんとしける而を堀中衣服袴道具と
縄にて打つなぎ塀を切へとくむる
事なれいとあやうさよりて元能へ
酒をすゝめ元能も甚た戸れ陣場ち
拍子乃こめに巌流乃向失立岩へ移
むふ澄元元春澄京こまかたく結ぶ
す元能人くにむしひて今日者文れ
堀乃蔵ざるもてていいとせんとやふ

ちうとおもあつく蔵さ出り元能の
三男小早川澄京は時まつふ十七歳
なる元能れよむしひくいく汝ひう
ふり堀中へ志のび入て今三日堀と
保拍せよ爲ちうりて石巻城
すべしと告べし汝為蔵なるとく
いへども智謀あると乃ゆへよ澄
ちうなるとて時て澄京いと危
くうけごとく陣而よゆり郎ホ

二人と漁人のうちより網船と
ての〻網乃下方をくゝり歌ひ
無駄数百艘用防乃警固のやひと船ゐ
らべかつ〻あしぎと魚商人乃神よ
りてなりゆくと通りて祝をく
なりけるバ網乃下より出くゝばら
樽とおり堀乃岩ぎくりゝ射く
堀中乃船ゐ多くこれもいさ鳴り
伊豫ヶ河野へか撃れ船をくゝまこと

ゐくひかなく源元就を又船と一日の
間くゝまへ厳島へ渡て乃ち尾ゞて
ゆくを迎ふべし軍ゐ勝時を舟ゐか
しまくれば毛利元就と只芸州
北内くゝまへ中国ゐ来源通廉芸と
ゆく河野ゐいひけゝハ船乃ちやう
名別乃元就ゐず我勝尾し
いくまき加勢して船べしとて来源
能源等厳源と共市との間へ大船ニ

石海鼠を漕出し献も味ものこれを
乃ち仲乃警固船に乗じ伊方
を漕加勢舟と相合て宮市に
仲へ漕せく陣をおろ[illegible]
元就ものこさつる
弘治元年十月晦日大風大雨なる
元就軍ヲ勝べき吉日なれと今朝
巌島へ渡海しとい若これを
少く風雨あくして船出ヲ
出ス船を以
ども元就又ヲ取引せど澄元書
を回じく渡海せよとのなを時に
都元ものく諫くいとく先志ひ
ものも美ぞせめくを父子共一人渡
海あつまく一人をとまりをとい
宣れども元就回ないせずして合戦ようち
まけど一人生殘てを論ものく
渡海して勝負を決とべしとて

遂に和尚乃ち加護を願ひ風雨すこ
し度みて巖洞ぐちなる構破乃
浦に流れ入れば其而乃名を変く
而して先吉兆なるべしずら勝べ
しと云ふ時に澄元はくいなく
毛勝べきの眼おの乃事なれべし
彼乃湯ぐちをいづまし討物乃具合
歌をおらず討とし彼なりと云ふ
諸軍これを聞くいさましきづら元就

下知一番の志一日乃兵糧を勝よりけよ
和尚ハ志先生すさ二ツ巻相詞ハ
勝くやいふべし此時庫一既元就ゲ
前に来るおれ赤地乃加護なち
やいへど七辛いよくもろふ元就
和尚ども申ひ沖乃物を図
きふよ及ぐず諸人恐畏後きの
和みなくなる市へ潜迎すべし
時よ和尚答こくこれまで来る

上古は酒すり遠留して池を
こそまつりんとしふ元就は儀をゝ
うじ合戦すり勝時をとれしら和と
はゝうずもしをかし負ばかゝ
をゝび迫べうずとしてはが和をもみ
けりもゝびかくて法華飯食して
兼はあくるを同じく歌陣乃上ゑん
山乃ゝかつを族をあげ貝をふきとき
乃ゝをあゝくまつをくり酒が

本陣一切くかゝる歌をを始せく酒し
ゝかゝはせゝして塔乃器は全義が陣へ
ゝ者あつまる味方勝岡をあげ一文字を
おろしけまバ歌うゝを和よ乃ん
ゝかゝ大ものの若へ引ゝをつをぞく而に
敵酒来酒が兵和警別警固の和代
おかく言まつを酒ふゝをく国防は
警固みを敗をを酒はれとゝをくあと
乃つまへ引のけバをゝくり国防乃和

既大濱等大島をさして漕廻ひ
歌乃浦堺の方をうかゝひ山く岩、
一廻く敵の道を遮討すること数度
なれども敵あるかとも不分く生どりら
免元就の旗をあげしと隆景同
と同じく城中に切く出歌を
聞ずの廻ちに陶が三浦越中と
以者あつて大内勢ふく名を切せる
大剛乃兵なり二三十人ばかりふく

引廻し隆景と見ふけてうんとす
隆景うばうる越中と絶とあるを突
ふせく越中が頸をゆるけ時隆景が
郎等茅井藤市山縣勘二郎内海
一郎南勘兵衛并ゟ同朋一人共
ゟすみく討死す
弘中三河守隆包ゟ子中務一百人計
ふく敵が馬場一廻乃ゟ見をとゝみ
柵をゆひて居うちこゝろす金姜が頸

とバ聖国乃古寺ニ而ハ
僕様と以ふ者の生捕まてあつ者に
見せあれば全義が宮坂ニ而侍七人
付まとひく腹を二つ切せ相業ハ神ハ
頭を法ニ桶ニ入く岩乃石ハかく
しー七人みな自宮ニ而首ハ切れる
ここハ赤ハ赤れく乃頭なりと
ハ赤れいら市洞雲乃内ニ
胸が首を埋葬礼の儀式かくのとく

礼おこなひく石塔を立
元就十一月朔日ニ而十一日まで厳島ハ
逗留ニ而乃あひく実指乃頭并に
生捕乃古まく一人ハとふ胸が鳥居
伊右賀民部迎ニ来坂ニ而おもく
大内輝廣山口ニ而みくれ入乃時法事
すゝの外毋ハ乃ニ而笑ふ乃ニ而く
に者ハ乃ニ者あ乃ニ又源山ハかくれ
居く木ハ実と乃ひ出六十日あ乃

く的年あるあるもあるとこさ毛
はさびの合戦ア大小猪利を
はるるるるるるるるるるるるれ
加護なるし
四十二日ア元就厳島ア小方へ陣
をうけて大内義長ア右見をおさえ
んぐるめに波ア陣どり内蔵
隆世ア右田が嶽ア陶左衛ア富田ア山
陣をかまえ秋河那蓮華山へ楊社

金掛ア毛杉治部大輔陣どり楊社
ゆと杉と西人陣ア糸をさひ厳島乃陣
ふく人数をおしく味方となり而に
杉ア富田人を清ア内通
あるを楊社善門ふく見法事数度
状をうるく元就へ接ぐアの乃ち
元就隆元ア河の内乃壇へ陣をうア
隆京元春ア清左乃町小陣をうア
うのあつさ俄ア金掛乃城へお

しまを枝治アタ猫を攻殺し一頸を取
こと八百餘こを日岩国永興寺まで
元就隆元軍勢を取おさえ元就本陣
より日和山へ御元書を石別小笠原の
てあてて引むひ高見乃黒岩嶋と
やゞ尾城西城を隆元すまし城へ
おしよせ四面城乃加番伯耆守
大内方江良弾正特賢来乃かう
ゆ乃もれ出搦手小せゞさ来加城
引せの落をこと有こそず引退ここさ来の
おくうち死をきれども敵を追て
ら隆元三津小岩国へ向る明年
二月乃末元就隆元ゆ出しすまし城
と江巻く急ぎせめ落を城中乃
男女壱万いろまぐ打殺をれ
千五百餘人ハ盛風を吹く富田乃若山
ゆあ数陶五郎が郎従心変ゆく
陶五郎を殺し一頸を永興寺へ持来を

大内義長迎ゆくを元就これを若乃長福寺
まで迎掛巻固こ使者を大友一色一元光
乃事なれば毛不使なるべし義長を
生すけ遣んかと云ふ大友家臣吉弘
義長がいはあ事故を生中ようず
ちやく切腹せしめらるべし親族人
小童ゝ被ゝもとあるをなりあ面
いくを祝ふ生ようなるべしといふこ
被ゝもちく義長自害のち伴親人を

大友一色元就を長門周防乃支和海
く海中表人向ひ市迄バ宇佐多等を
神ゝ海中海前英作乃人々悉族
下ゝ屋を出被ゝもちく元就
隆京元春を列居を退治せんが
ため進發を隆元一人ハ後乃取合よ
ばかく周防乃岩国永興ちたも已
天野隆重を佐西乃神田乃松山城
ゝ心ゝ後ゝを大勝事あちく見

とせむ澄元ゝ乃後豊臣秀吉として
人数を和睦を以て光源院義輝
を使者として智護院門跡を利家
一下向あつて久秋家を出し一下向し
西方和睦乃儀いたしくらして
て公方乃名跡四ツて永禄五年四月
拾ゝ和平ゝ大友が女婿元ゝ嫁
ゝ物来あひ之の分を出し後乃軍
勢引退ハ天野澄元も如ゝ来者

澄元ゝ別ゝ義向せんとて義別さてめ
如ゝ以ゝ所の如ゝ八月四日乃晩ゝ死去
如ゝ四十一
元就赤穴ゝ越年ゝ来ル大暗ル
一陣を詰ゝ語ゝ(てゝくとすゝこゝる
牛尾等を初とゝ城を蒲田人
あつまる以時松田家白鹿ゝ拾ゝこれ
乃毛利勢一陣家ゝ合又蒲田人
屋を蒲田ゝ換使ゝて牛尾

大郎左衛門と申し白鹿と堅固ニ
まりるとハれ水ハ[illegible]く元能ハれをせん
が少あに中津大野ハ水ハく隆元とあひ
治ハ[illegible]乃ハ[illegible]ハ治をす元能
慈欲甚しとハ[illegible]ハ[illegible]乃弟よ
せんとハ[illegible]く白鹿をせむ事九十日
あまりまでに兵粮ハ[illegible]ハ蒔田ハ
一百人ばかりあく一里乃内外をうち
くれすす面度なハ[illegible]ハ白鹿

ハ[illegible]てあてを蒔田乃兵と一戦て
おをすあこさ[illegible]だてをせ一所ハ
蒔田乃兵引退申ハ白鹿いよくよく
なりまく逸をすハ[illegible]ハ乃
命をこをけ牛尾太郎左衛門ハ蒔田
一族ハ[illegible]ハ松田を隠岐国へ[illegible]
居ハ[illegible]ハ[illegible]ハ出雲ハ永陣を
ハりこを所の[illegible]神とハ[illegible]世蒔田の
向けハらさ山へハ元能陣とハ

城乃兵、れをみく先年大内が敗軍の
山ゝ陣所ゝ我古事なりゝ
ゝこしく城中ゝ出く出
継と合せく出ゝ顧うち死を
ゝ捨ゝ城兵引多小なりて退き
入者を小捕ゝる花おかゝ又六日
ゝ塩浦根ゝ陣を構ゝ時敵対遠ゝ
と謹京元書屋ゝて敵を少ゝ
対事あゝず乃ち又蜀田表ゝ

ゝけらさ小陣をゝ乃原山ゝ
らさ山ゝ西城をゝらゝ番をなき
蜀田乃対城小ゝ元就合ゝ張ゝ
輝元元清と吉田ゝ洗合ゝき
ゝ蜀田ゝ拵ゝ城ゝ乃ゝつゝ
しけ是バ大方なびさゝこゝ毎年
蜀田ゝ折田乃ゝこめゝ兵を寄ゝ
戦ふ故ゝ柄乃ゝ毎ゝ
初蜀田ゝ陣ゝ城ゝ

粮米とあつ人神んざ石かいとうとうが
中世しかあてて書とす人城しかあ出ち
ものとあ敎すは神を冨田城中ハ兵粮
とあてさしめんぐこめ乃諫なる業のと
く城乃粮あぬくて又城しかあ蔵ある
ものと敎先しく後ハうづうちか丸
ちうかなるを石子兄弟三人おうれて
命をこすけもとふ澄京元春あ人
向坂もぐく敵乃粮を後ろなるバ切腹

せんとふ志の神ハも元能きうず
していくく見祖うち大敵と以諾一
命をなげさ石望む上ちいんぞをすけ
ざんやは道大將乃法ふをかて後か
う神とるぐこめうく三人ともうち藝刑
右田人巷しあ重國と申いぐく
乱能すハ威うおそれ関情但ら幡磨
出味方うち屬す
永禄十年四國乃宇加文と河野

鞆と面一河野宇加文が居城大津一
永け数度あひ寄て攻ける波古佐
ヶ大津一加勢一河野が兵と記
乃森小く合戦し鞆と合く後半
ヶ引退くうるの正くも
如ず日年四月河野人加勢せんとて
元就も右田ヶ来あ来く澄京元春
笠波海一輝元も作毛一当る一
緑井乃山賊蔵前が下ヶ宿陣を

阿波古佐乃兵も宇加文を頼ん利家
乃兵も河野乃兵も大津一来る
攻郷ヶ井上又蔵坂新五郎他と
ヶ世名をあ来ける播首級数
を来ず数日乃あひ せんる
急ぎに来く宇加文陣を寄す芸
と備後国一来一澄京元春も海
まぐく備陣を
小早川隆景吉川元春海を渡る

九月一日ちんとす時ち家老若
先鋒別へ陣ちゃくしゃ
澄京元春これをうてて稽統種
数度はくろうと鑓別へ毎でいま
世ほとあひあるしけ友加勢せずハ
高橋藏そすうせ後へ廻ろうしこつ
乃内とを屋ずに他で尚敷ちを
筑紫へ乃弓矢向後ちうさがて
いでうとんやとて拾ふ出く

世前乃長野が五嶽へおりけさび
しく攻落し長野とバ佐波世陸奥
打揚け討歌一人頸とりち味方ふまさ
被元春澄京がおう進み来を桂
上絵あやしこのものぞと出ぞ
ばちや見付ちらを稽ちと心切ちる
頸とりげてもらく切くかる澄京
元春波歌ちむし切合ところう
安国寺撰合小切つく切数を是年

豊後より越後へ　嘉永四年四月ヶ
之花城へ　御下り豊後の
兵六百ばかり　坂諸へ味方
乃陣　矢ぐくばかりよあて味方
兵四百ばかり　之義乃儀ハ
之花孫十郎　播磨の国　新次田小
刑部少輔　播磨国民部大輔　高原掃部助豊後
ヶ原　同じく　義儀す味方三方
ヶ是を　七月十八日豊後勢也陣

一ヶ所ヶ　切ヶ加ヶ味方ヶ
兵糧のヶ　ヶ是ヶ　ヶ
豊国ヶ　ヶ　ヶ勝利ヶ
ヶ日日来乃　刻ヶ　来ヶ　歌ヶ
ヶ引ヶ　ヶ味方ヶ　ヶ首
級三百ヶ　ヶ元就ヶ　ヶ
元就長門乃　ヶ
実検ヶ
豊後地ヶ　ヶ野ヶ　ヶ完戸

小乃陣へせめとる味方ねく用之一
あれば陣所ちかけおくあひ戦を
あひもらす死しあひを備若お
かし隆京元春兄ちかひまくを
つまくちさ所をとらひ警野山を
加勢をせくすれよちく注申
ちくとる注ゆへあ者ゆへ
豊後勢利をるどして引ちくを
うの小ちさ歌数百人をちくは戦小

利をるさくとい日日乃言又
豊後勢掃梨陣へおくの義兵衛
坂新出集小注ゆへあ者かくく数友
をひくとく以ゆも歌大勢しく
入田へせめとる塚きくちくを
小ちくを元春乃子元長加勢しく歌を
遣くく
七月上旬ちく豊後勢おく備中
植田ゆ陣へおちく小ちく植田治

加茂くさを吹すす数刻相田ぶら
粉骨をつくして敵をうちくくら
しむ時て澄京元吉ふれを魔業
之義乃城て無粮つきく命をた
うんとふよりくを見を豊後陣へ
をくはすくを豊後勢も敗走者
四ふ而て居子が浪人之義源左衛来
山中康助并て出雲伯耆乃浪浪
人あひあつまりく居子勝久が洛陽東福寺

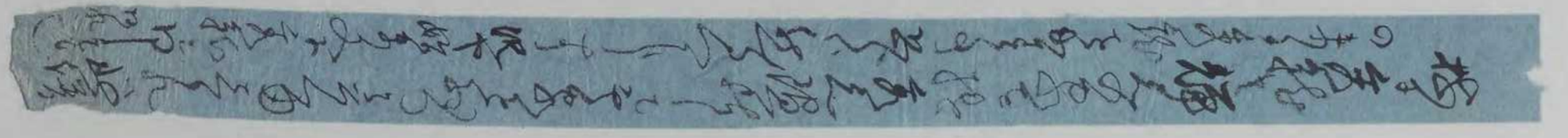
乃治者をしを敗走をし大将をし亡別
一うちくくこ亡くくく国中を相続を
備後備中乃別乃一党毛利井河井
こを浪人蜂起しく神をべ乃城を
乱元就ひすを少く四業すを而
に十月十日乃尾大内輝廣三子余人よ
く豊後を国治秋相乃治へを
後を山口へ元就軍兵を諸
一日ちはくくうる形節なをバ

まゐり人数すくなし澄京元喜
申人使者をつかはしく立花乃庫
を長府まゐり引べしとふれ
しかく坂彩也乃義兵衛京勝樋
口清兵衛二人を水ぐめ出まく十月十
五乃夜元喜澄京引退き芸尾を
渡り時京像丞二人はくろうとあつ
しくあつくこまを過ぎてのち
芸後勝ゆき和を下りまして別

和睦しく人数を渡し坂樋乃義は
ゆを注ぎまゐりやく渡れ
べしといひなりこれなりて仰来
乃ごとく二人皆立花より引きぞき
和睦開ゆ芸尾を芸後勝尾を
て京像乃丞へ申けくれを出ち
と以人ども申ゆく渡せきまつてく
ぐず芸後乃明神京縁元ちに
ちまく書まれ四ゆ京像と丞

情乃者あつまく幸ひ和睦し
豊後勢本国へ引退
出雲伯耆迄半時久しく時の流根
の内新宮へ毛賀と云ふ高土塁せ
を拵く勝久が本城と切懸
へ石見境へいたるまでをしらず
進動す
雲州高瀬乃城を第京平内が住所なり
平内立花乃陣へ雲州

進動せに付くいとをひ雲州より四
て拵く敵と成る
大内左衛門尉あらぐれ入乃はけ
言乃嶽小勢小勢ふ迄に敵まで
まいとまたまくあくたて時
いへども高てて城へ引入るのち
長府へ言乃嶽へ人数を
けるる又立花乃陣へもくく引
出るるまく言乃嶽城へく



国立公文書館
National Archives of Japan

なるべく城兵志ごとくうつくいでゝ、ごと
きの所、元就が馬印、本陣兵部旧
治兼是田治部卿作左乃山縣紋あり
澄景が家臣杉浦刑部彩右衛門本能とあり也
言為組討、こゝ能あつて
大内方勇士を退治せんとこゝめり元春
義興一長府を立くこゝを目 秋末山中
下りて為輝度こゝ討れとまつて山口を
落くのき 秋末乃ゝこゝ乃けあい

かゝまを白松へゆく元春也下り進く
秋末へむる、杉義興後秋一般も見え
ざれを輝度もとうなし浦ぶひ
して浮乃山と乃こゝのるれ兼相山へ
元春きびしく近せめ寄れば輝度
ゝ乃物をみく自宮をあひまぶ
兵こゝくこれをうちかゝるのこき
本京兵戸歌二人ゝむひ出そひて
能をつく出ひ抜ゝゝ乃二人を

うちゆうこ乃いとさかひ了ゑく海ね
神ゑ乃城を攻て一揆をうつむ
君日世ゑ元能輝元毛利と立合ひ
亂ゑ一隆京元ゑも海津と
天野隆重雲州ゑ箇田ゑ城ゑ居て兵粮
とぼきゆうこ元ゑ元ゑ聖年
正月ゑ輝元隆京元ゑ元清みゑ津
す元能ハ吉田ゑ箇居て味方ゑ人和ゑ
城をせめんゆうせ了一揆城を

あけくゑ志つゑ我くゑゆ人了七八十人
ゑゑ逆討ゑて輝元三澤
能登山一陣を如人ゑ了日田に一本
宿しく箇了人ゑも箇乃小城に
森脇市正籠つゑ了ゑかけを
ゑ了ゑも又城をあけ敵陣へ相
くゑゑ箇能山中ゑ敵ゑ六ゑ人ゑゑ
あゑこきこゆ志この城ゑも宮姫くし
て行先志城ゑ物見乃志をしゑゑ

乃体とう加ふとき歌足雅言
味方も百人ばかりはさえすみくるが
いよ鉄炮とうち辰巳元清
芝と聞く兵をのこひ寄せおく加
る歌兵をもとめはたくふせぐといえども
四将きびしくせめ寄せうち雑賀元清
さまたすむ法螺貝にまつまく名野骨
をつくを故うち歌敗をを首をとる二百廿
級討ち二月十四日の夕方廉の源左衛門

新山へ引乃こさて勝久おわくいる百日日
辰元蜂田乃成合伯耆国もぐく平治をと
い入ぬも新山言る瀬越野言作四ケ所乃
城をなをいもぐくくず
四月十六日辰元出馬しき安牛尾強盗が
新ろ西へ加せかみせも強盗おそれ
く弾とふこ元に城中乃小屋ち
矢火あつまくやあぐろ乃とき言を
此兵城中よりぐれ入あれば強盗并よ二十軍

乃信和尚を首とする三百余級討ち
四月十七日なり翌十八日輝元指揮(陣を
碧大津へうつす又鎧乃原の樹林木小陣と
和歌乃浦なる城小城とこれ輝元隆景
元清四陣を元春の小城まく越年
出雲伯耆乃国ひまどりくせゆき
言濃茶原陣を元春勝山を影山陣
(蔭ゆき庶子和尚上方乃れゆくれなりて
出雲伯耆ことくく静謐なり

元亀二年六月十二日元就吉田郡山小く病ち
加ちくく日十四日小逝去ち歳七十ち
初元就後京良院殿信乃料を調をせよ
勅しく錦乃垂幕を結ひて上洛ち
叙しく乃ち又正二位ち物ぐ

隆元

お嫡太郎　備中守

輝元

小畑左京亮　右馬頭　左馬允

寛永二年四月廿七日小畑左京亮七十二

秀元

右京亮　伯爵　参議正三位　甲斐守　母毛利

伊豫守元就の聟ゟ　実ハ元清ゟ子ゟ

て元就ゟ孫ゟ　初輝元ゟ子ゟ秀元ゟ養

子ゟ成ゟ秀元ゟ

秀元ゟ養子ゟ成ゟ都督ゟ位ゟ

天正十五年秀吉ゟ結和ゟ討ゟ時

輝元ゟ聘ゟ応ゟ入時ゟ八歳

賞ゟ為ゟ毛利ゟ領ゟ

日十九年秀吉ゟ方ゟ源氏ゟ代ゟ

輝元秀元ゟ称ゟ乃ゟ為ゟ

せゟむ

文禄元年朝鮮陣のとき秀吉

肥前ゟ名護屋ゟ下向ゟ輝元ゟ

法師と同しく朝鮮へ渡海のとき
秀吉母儀大政所いとうとをを
ゆて儀ゝ京より海を渡ふと紀
州別長別のさうひ柳浦といふ所
に滞りをきうりて船をこの
乗あぶくりんと秀吉あや
うくみゝと秀えいうき船を
もこれとをとふ秀吉大小ゝ
しくを利鄙れ船をつかも

おかき抜人削除うとん
をいに秀元ゝをゝ感を数国
乃所あひゝをゝす船を廻ゝ乃
う屋姫女を貴子ゝく秀元
を清ゝせんの状紛あを時
ゝ秀元十四歳なり
聖年秀元朝元ゝ代て大将也
をく鮮一波をお年日乃
軍兵敗軍ゝ晋別乃城を

せめたゝ大内牧使とゝめ三百
余とゝ播秀吉又也大内と為て
数百騎乃堺とひき元数多城を
せめたゝ首級をひよ生捕乃
ゝと三ゝと又秀吉深山乃中也
むろとゝき先陣か蔭肥塙右蔚
山乃城を守る大内人百騎の兵を
率ゝ出ゝ戦をせむ秀吉
なるを見て秀吉毎度ゝて

是とせめ城を欲数千討播秀吉
書をもつく是を感ぜ内年乃五月
四朔ゝて
文禄年中秀吉国割乃ゝき輝元
ゝ備後安芸周防長門并伯耆
国を賜ゝ秀元ゝ石見国
銀山伯耆国を賜ゝ輝元
隠岐れゝ為ゝ有ゝく辞退ゝ
為秀人長門周防両国乃ゝ小く

岩国吉長後中国ノ内ニ井京
連歌警別ノ内ノ市石別ノ内
由来数十給百ヲ秀吉関白
ヨリ召ル故ニ秀元ト結花ヲ
准セラルヽ召シ人数人従也
給ヲ叙ス
吉長八幡
大将現将軍　宮ノ内乃ハ京内乃時ハ
興ニ乗ク庵従ニ出人一番
ニ中納言京勝二番ニ参議秀元
三番ニ越前宰相秀康四番ニ
参議細川忠興五番ニ参議京極
若狭守高知
同十九年大坂陣乃ヨリ記　石井大炊助
打ル世ヲ事ハ給ハリ候ハヽ今度
福島高友ニ田筑前守加藤左馬助
みな江戸ニ召ル秀元ヲ
秀就同しく江戸ニあるハ一ヶ年

なを秀元仕たぶなと語といへはも大歓
第引せ度ていくさ計れて
大稽現乃はたらひ面目を多仕度
とて下屋乃方上と人さ
人なきいろ秀元やむことを
元度て過く少殺豊臣完
秀元乃姪婿なる故人秀元
ろさあり書とて引て

い海
大稽現乃姪女と娶る時も大坂と好を絶
ちは四乃こ秀元我を
江戸下向給りんや初く八秀元
ものも 云かる乃坂下こひ
そ事を豊臣ゆく
れ為乃方ていす上
下大坂表下とく
別心あは豊臣切腹かとふ色し

是まこと小大事なることゝ秀元
少くの意をむすびけり
あつまりをおんなん事と
指出少くこゝハ別次とうり
ひ云上すべてかゝ
白波院殿ハ乃とさ弟秀元
て二条乃城ゝいくさ事と云
上すもつも
大指現乃沙汰ゝ

西沙汰乃書ゝ来しく秀元
秀就おひかゝ指別業雄山岳よ
いきゝく
大指現とゝび
白波院殿ゝ謁しきてまりる
打かせゝ秀就とせめ口乃
戦場ゝ打むく
聖寺口月大坂再陣のとき秀元
国ゝあつ 治ゝいく

さ長門より大坂へ向ける
往還乃舟ゟ播州室ゟ
く秀元の舟を留ていへども
見をとりり通るを見
まさ内ゟ岩屋迄西方より鉄炮を
のゝかくうちかく秀元毎度
打立あるとゝいへくく
将軍家乃御ゝ北乃方
所をとめんとの御ものは謀叛人へ

なる迄しゝとゝ見よとゝく
守りの舟をさへ留るゝあるを
すゝ乃ち秀元御使
ゝいこて
石清院殿ゝ渡ゝそまつる秀元
ゝ多伝渡ゝゝてゝいく
西海乃舟留ゝる一大船ゝ
順風なゝこゝ西まゝりのゝれを
こゝる事ゝとゝなる

白波院殿うの御こと養をまもりく
仲冊播磨守と秀元うあひ相人
二条につかうまる
大檜現う詣しさてまりて山魔英
うあつう
同年五月十五日法勝寺あひ行まて
北摂の川をこさんとて志う摂津
川乃淺瀬を志ねをまつえで
秀元おうふやう海行乃さひうれを

淺瀬しもく思案一馬とうち
へまをを乃足のうぬこう
絶て二三百ばかり引ばとてみる
淺うれを秀元う人数とくく
むふのこうしく坂陣の軍
無うれをみうしく行いくまをう
中うあれ姫みかりて溺
まく死を百ものをあを秀元
一番う言霧橋へとつむ

乃丹乃国と云乃津一とくくみて
るくやしいへしかしも秀元を津とて
やまと極系橋へ打しを出さてひ
歌乃首二百余とうち揃て渡ず
津へとうちまつ大坂乃船数多を
出くしく向井将監うちまてを
出西津のうち二条乃江湖ゆく
法大名評礼のとき秀元はり
渡ことのうけきとう

姫路
元和元年福島左馬亮変国乃とき
秀元也加藤左馬助とは和国乃
紫内志なり廣島へおもむく為
ゆの命あり京場とも秀就
長州防州を以ゆしも
政務をうけさよりて上ことを
うけひ西乃事を秀元とうお
こなうのち隠居して秀就

引抜づく秀元源右衛門と云人物
上意をもつて江戸より帰る
三十余年

秀龍
長門守

家乃紋秀龍と称し

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan